

会長講演

家族看護研究の模索—家族と取り組む知の創出と共有

村田恵子（神戸大学医学部保健学科）

日本家族看護学会は、国際家族年に誕生し、わが国の土壤に家族看護という新たな実践・研究・教育を拓き、今年は11回目を迎えた。そこで、次の10年への幕開けに臨み、さらなる発展と社会的貢献の基盤となる家族看護学の知の創造と体系化を導く家族看護研究に焦点を当て、今回のメインテーマを

「家族看護研究の推進—知の体系化と家族ヘルスケアの向上—」とした。

わが国の家族を巡る現状は、時代や社会の流れの中で大きく変貌している。すなわち、超少子化・高齢化、核家族化・小規模化など家族の構造的変化に加え、家族観の多様化や家族機能の縮小、家族を取り巻く地域連帯の希薄化、さらに健康・医療面では慢性病や障害のある家族員の増加と在宅医療の推進、遺伝診療・臓器移植など枚挙に暇がない。今日の家族が抱える課題は増加・多様化し、その複雑性は増している。

それ故に家族が様々な困難や課題を乗り越え発展を遂げるためには、家族自身の力と強力な支援システムや効果的な援助が求められる。今後、社会における家族の看護ニーズは、一層高まることが予想され、これに応えるためには、新たな知の創出と集積、その活用による家族ヘルスケアの向上が期待されよう。

筆者は、臨床から教育・研究職に移り間もない頃、恩師の波多野梗子先生より、家族のヘルスケア機能や患者を含む家族を単位とした看護の役割をご指導頂き、爾来、育児期・教育期の家族と共にこうした知を見出し、共有していきたくて考えてきた。

家族看護に必要な知の源はむろん研究のみではないが、家族看護学の知の創出と体系化を導く研究には、個人や地域集団へのアプローチとは異なる視座からの研究課題と方法論による家族看護学研究がより望まれよう。

この度の講演では、これらを改めて問いつつ、わが国の家族看護研究について、特に育児期・教育期に焦点を当て、これまでの動向と今後の発展への課題を再考してみたい。すなわち、どのような家族現象あるいは家族看護現象が研究テーマとして取り組まれてきたか、そこでの家族の捉え方や理論枠組み、研究デザインや研究方法についてはどうか。これらを自身の研究をも含めて検討し、これまでの成果と限界・困難性、今後に期待される研究テーマや方法論的課題について述べさせて頂きたい。

また、現在不足し、今後、より期待されると考えられる家族ユニット（システム）研究および家族介入研究の模索として、家族と共に取り組む知の創出と共有への試みの一端を紹介させて頂き、皆様からのご批判・ご助言を賜りたい。

これらが今回の学術集会の意図する家族看護研究の推進による知の創造と体系化、その成果の実践への活用による家族の健康と幸福、ヘルスケアの向上に向けて、皆様の活発な討議・情報交換、新たな研究や実践のネットワーク作りを推進していく糸口になれば幸いである。